これからの日本のあり方について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/32440

これからの日本のあり方について

東京大学名誉教授
建築家 安藤忠雄

年々上がり続ける気温，止まらぬ砂漠の拡大，多発するハリケーンや台風などの大災害，人口増加と比例して深刻化する世界的な食糧・水不足，環境の激変で絶滅の危機に瀕する動植物—1972年，ローマクラブが発表した「成長の限界」がより間近に，リアルに感じられる．

そもそも地球という資源は，無限のものではない．循環的なプロセスを持たずに激しい資源消費を続ければ，いつか底をつくのは自然の理だ．一方で，科学文明の発達によって，そこに住む人間の数は10倍単位で増えてきている．無秩序な成長を続ければ，破綻をきたすのは分りきっていたことだった．私達は，その事実に，長いこと目をつむってきた．

もはや，自然の保護を，自然に頼る時代ではない．人間自身の手で，永続的に両立しうる人間社会と自然環境の関係を構築する努力を始めるべきだ．

とりわけ，私達建築に関るものの責任は大きいと思っている．そもそも自然の中に人工の環境を作り上げていく手段の体系である建築は，本質的に環境破壊を伴わざるを得ない．木材の伐採や石油の採掘などによる自然破壊，そして材料の加工過程，設備の重装備によるエネルギー消費，さらには建設廃材の問題．その存在自体が環境に負荷をかけてしまう，建築こそが環境問題の元凶といっても過言ではない．

ゆえに，問われているのは建築が環境に負担をかけることなく，存在し続ける可能性（サステナビリティ）である．

具体的に言えば，日常的には化石燃料を濫用しないような環境制御のシステムの開発，長期スパンでいえば，建物の長寿命化ということになるだろう．

建築界では，とりわけ前者について，オフィスビルのバッファー機能にすぐれたファサードシステムの開発など，興味深い技術提案が数多く見受けられるようになっているが，より本質的なのは後者の「いかに建物が長く使われるように出来るか」という課題である．

大量のエネルギー消費と大量の廃棄物を後に残す，スクラップアンドビルドを改め，建物を長生きさせていくことが，建設に関わる二酸化炭素排出量の低減と言わずとも，環境配慮として最も有効な手立てであることは，誰の目にも明らかだ．

それは，これから新しくつくる建物のための技術開発の課題というわけではない．むしろ，そうして絶えずより新しい“商品”に更新することが発展と思う風潮，何よりも“建物も消耗品である”という人々の二十世紀的価値観が，これまでの破壊と建設の悪循環の根幹にある．環境問題が難しいのは，常にそれがこうした人々の生活価値観に関わる問題をはらんでいるからである．

重要なのは，これからいかにつくるかではなく，今既にある建物をいかにして長く使っていけるかということ—社会全体でそうした意識を共有できれば，環境問題への応答と同時に，日本の住環境のレベルも上がるだろうし，さらにその先にある，建物の再生，再利用といった未来へ向かうテーマも見えてくるだろう．

日本の，世界の，地球の未来のために，二十世紀的価値観を超えて新しい時代を切り拓ける人間を創っていかねばならない．

かつて日本は，悲惨な大戦から奇跡的な復興，

経済成長を成し遂げた．「アジアのけん引役」と期待された，その時代をつくったのは，ひたむきで真摯な人生観，人を思いやる協調心といった日本民族の民度の高さと，何よりも，全てを失ってなお，あきらめずに立ち上った人々の死に物狂いの頑張りであった．

だが，取り戻した平和と，勝ち得た経済の豊かさの中で，日本人の心は鈍化した．現状に満足する余り，生きるために考えることをやめた．その象徴が「大学が人生のゴール」といわんばかりの過剰なまでの学歴信仰主義，偏差値重視の画一的な教育制度だろう．そうして弱体化した日本人が，現在のグローバル化した激しい競争社会を前に立ちすくむのも当然だ．今，世界はとてつもないスピードで動いている．その渦の中心がアジアにあるのに，そこに日本はない．

生まれた国も言葉も違う人々と渡り合っていかねばならない国際社会．その中で，地球そのものの問題も解決していかねばならない．今までにない，厳しくも難しい時代が始まっている．

そこで，最後に頼れるのは身体から発する人間のエネルギー，生きることに対するどん欲さだろう．〈ゆとり〉で〈個性〉を育もうという教育改革があったが，大きな勘違いだった．取り戻すべきは日本人の〈野生〉である．必要なのは，厳しさを伴った自由な教育である．

安藤忠雄　Profile

大阪生まれ．独学で建築を学び，1969年に安藤忠雄建築研究所を設立．

代表作に「六甲の集合住宅」，「光の教会」，「FABRICA (ベネトンアートスクール)」，「ピューリッツァー美術館」，「地中美術館」，「表参道ヒルズ (同潤会青山アパート建替計画)」，「プンタ・デラ・ドガーナ」など．

＜受賞等＞

1979年　「住吉の長屋」で日本建築学会賞
1985年　アルヴァ・アアルト賞
1989年　フランス建築アカデミーゴールドメダル
1993年　日本芸術院賞
1995年　朝日賞，プリツカー賞
1996年　高松宮殿下記念世界文化賞
2002年　AIAゴールドメダル，京都賞
2003年　文化功労者
2005年　UIA (国際建築家連合)ゴールドメダル，レジオンドヌール勲章 (シュヴァリエ)
2006年　環境保全功労者
2010年　ジョン・F・ケネディーセンター芸術金賞，後藤新平賞
2010年　文化勲章

2011年　東日本大震災復興構想会議 議長代理，「桃・柿育英会 東日本大震災遺児育英資金」実行委員長

米国イェール，コロンビア，ハーバード大学の客員教授歴任．
1997年より東京大学教授，2003年より名誉教授．
著書に「建築を語る」「連戦連敗」「建築家 安藤忠雄」など．